

湖北の原風景

舟の木の詩

ハンノキのうた



湖北アーカイブ研究所

吉田一郎さんの二冊目の写真集が世に出ました。昨年三月の前作『地図から消えた村』と同様、いまは幻となった湖北の原風景「畔の木」をテーマとした詩情をそそる写真集です。

湖北の四季おりおりの風物詩であった畔の木は、昭和四十年から始まった国営湖北農業水利事業と、これに伴う大規模な場整備事業によって、次々と姿を消していきました。農業近代化のためにはやむを得ないものですが、私たちの祖先が生み出してきた農業を営む知恵や湖北特有の趣きをかもし出していた景観を消し去りました。

かつて畔の木は、稲架(はさ)やわらを積み上げた「にお」の支柱に、葉は肥料に、枝は燃料に、その他さまざまに利用されてきました。また畔の木の木陰は、野良しごこのころあいの休憩場所となり、木が連なる風情は、湖北特有の絵や詩となりました。

作者は、畔の木が湖北の田んぼから消滅する前、三十年という時の流れの中でシャッターを切り、自然のにおい、土のにおいを撮りだめし、記録し続けた人です。長浜市役所に勤めるかたわら、自らスキクワを手にして田畑を耕し、種をまき、苗を植え、草をとり、収穫の喜びを味わった人ならではの生活感覚が、写真一枚、一枚から窺い知ることができます。

作者が生まれ育った湖北の風の運ぶ土のにおいは、身体にも心にもしみ込んでいて、彼の写真に表現されています。美しい畔の木の写真のひだの奥底にある、湖北の心像がほの見えてきます。「畔の木の詩」の世界は、私たちが消し去っていったものの重さをあらためて教えてくれます。

昭和四十年代から五十年代にかけて、湖北の農業と農村環境は激変しました。共同作業や伝統的な行事の多くは崩壊していきました。方言もしかりです。

この写真集を縁として、湖北の自然を訪ね歩いてください。風のいろ、風のかたち、風のおい、そういう風の気配をほんの少しでもいい、感じていただければ幸いです。

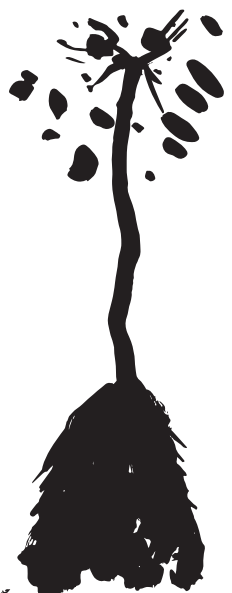
湖北アーカイブ研究所を支え、写真集編纂にあたって下さった方々、今後、順次開催されます写真展に向けて準備を進めていただいているみなさんにも感謝します。

目次

発刊によせて 三山元暎（吉田一郎写真集出版委員会代表）…………… 002

用と美の風景 吉田一郎（湖北アーカイブ研究所所長）…………… 006

湖北の風景
畔の木（詩）
HANOKINO



hannokino 冬…………… 009 コラム

hannokino 春…………… 063 立春から彼岸へ…………… 044

hannokino 夏…………… 109 冬に備えて…………… 184

hannokino 秋…………… 149

なぜ畔の木は消えたの？…………… 197

国営湖北用水…………… 198

姉川以南の琵琶湖逆水…………… 199 水との闘い乗り越えて…………… 202

湖北用水三つの頭首工…………… 200 農作業の今昔…………… 203

湖北用水の中央幹線水路…………… 201

あとがき…………… 204



タイトル文字＝押谷呉壁
装丁・装画＝三田村圭造

用と美の風景

吉田一郎 (湖北アーカイブ研究所所長)

Ichiro Yoshida

ハンノキは「榛の木」と書き、湿地に自生し高さ二十メートル以上にもなるカバノキ科の落葉喬木です。厳冬の二月頃、葉に先立って暗紫褐色の単性花をつけ、花の後は細い松かさ状の小果実を結びます。この木は日本原産で滋賀県北部から新潟県にかけての日本海側に多く見られました。田んぼの畦に植えられて稲の乾燥用に用いられ、湖北はその密度と水稻の稲架干しとムシロ干しの分水嶺にあるのが特徴と思われました。

畦には榛の木のほかに、「トネリコ」と言われる樹種や柿の木も植えられていたので、本書ではその総称として「畔の木」の字を充てました。

畔の木は田の畦の溝端に二〜三メートル間隔に植えられていました。秋、その木を支柱にして横に竹が渡され、稲束を架けて籾を乾燥させました。雨が降ってもお天気続きでも十日後に水分含有率一五〜一六パーセントの最良の乾燥状態になったため「照り降り十日」の言葉が生まれました。

湖北の畔の木の中に稀にあったトネリコは樹皮がつるつるで材質は緻密で柔軟性があるため、アオダモとともに野球のバットやテニスのラケット、天秤棒や鋤の柄、家具の用材ともされ、イギリスでは高級ステッキにも使われたようです。

多くは樹齢二十年ほどで伐採されて燃料にされました。下駄の歯にもされたようで大きくなると傍に幼木が植えられていました。畔の木は高さ四メートルほどで芯止めされ毎年夏に丸坊主に枝打ちされます。枝打

ちしないと日陰ができて水稻の収量が落ち病害虫の発生源となるからです。それでも冬までに多くの枝を繁茂させました。

畔の木はこうした実用のほかに、田園美術館とも言える美しい風景を創り出しました。春夏秋冬、朝な夕な、光と影で描き出される風景に圧倒されるような感動を覚えることが多くありました。雪の中ではオコナイと呼ばれる豊作と村中安全を祈る伝統行事が連綿と受け継がれ、酒宴の余興として俳句、短歌、情歌、冠句などの歌会が盛んに行われてきました。宴席の外での歌会に子どもたちが参加する村もあり、在家が歌心を培う場になっていました。早魃かんばつに苦しむ中から生まれた雨乞い太鼓踊りはその衣装や所作に風流の雅を加えていきました。

この「用と美」の風景が真宗信仰とともに湖北びとの優しさを培ってきたと私は思っています。

畔の木を今日では見ることもできなくなりました。農業用水と排水をよくして農地の基盤を整え、農業農村を豊かにしようとする国策の土地改良事業によって消えていきました。今日では一本もなくなつたのです。

本書の写真が、記憶の記録にとどまらず、滋賀の美の魅力に磨きがかかり、より多くの人の目に触れることで、美の資源が、滋賀のアイデンティティとして引き継がれてほしいと思います。そして、滋賀の美の良さを実感した人が、滋賀へ移り住み、その魅力を自ら伝え、守り手として地域の活動に参画されることを願っています。



冬
Funnokino

畔の木の風景には、そこに人の営みを彷彿とさせる生活の匂いがありました。
樹形から、リンチヨク人（丁寧な整然とした仕事をする人）かソソベ（雑な人）か
耕作者の個性が感じられ、積まれた藁、桑の木や柿の木などからは
雪解けの後に待ち構えている仕事のように見えるようでした。

田園美術館

湖北は雪国です。滋賀県災害史には別図のような平均最深積雪量図が示されています。長浜市北部、福井県との県境付近の積雪が最も多く、日本海からの雪雲が伊吹山地にそって湖北平野にせり出しており、伊吹山では一九二七（昭和二）年二月、十一・八二メートルという世界一の積雪量を記録しています。

降雪日数は、大津付近が年間二十日未満なのに対し、湖北の山間部は五十〜六十日。積雪日数は大津付近が十日に満たないのに対し湖北の山間八十〜百二十日で降雪日数の二倍もの期間雪に覆われていることになります。私の感覚では、積雪量が米原市内で十センチ程度るとき、長浜は三十センチ、木之本五十センチ、余呉町柳ヶ瀬は一メートルを超えるといった具合で、南北僅か三十キロメートルほどの間にこんなにも雪の量が違いが見られました。

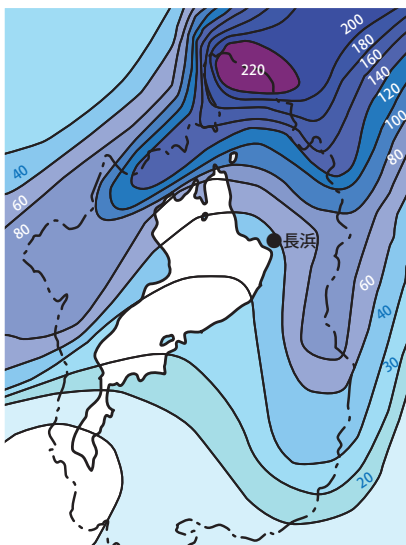
雨も同様で、特に晩秋は、太陽が照っているのにザーと雨が降り、すぐに青空に戻る「湖北しぐれ」に見舞われることが多く、農家はこの気まぐれ天気に悩まされ「キツネの嫁入り」と呼んで収穫期の防衛策として畔の木を重用してきました。

冬の畦の木の佇まいは田園美術館とも言える光景を描き出しました。吹雪に耐える木々、翌朝に見られた木の北面にこびりついた雪、氷点下の朝の小川から立ち上る水蒸気、ゲンコツのような樹頭の雪、雪原に踊るような縦のアクセント、雪中開花、朝日に溶けて垂れる種子の水滴、目障りなものを消し雪が消音効果と

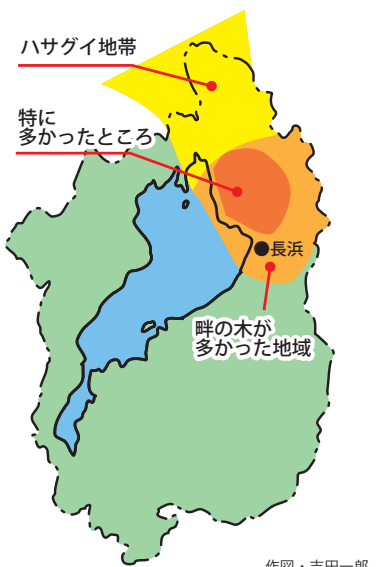
なって生まれる静寂の世界、すべてが絵のようでした。そこに白い峰を輝かせる伊吹山は圧倒的な存在感を示していました。

畔の木の風景には、そこに人の営みを彷彿とさせる生活の匂いがありました。樹形から、リンチヨク人（丁寧な整然とした仕事をする人）かソソベ（雑な仕事人）か耕作者の個性が感じられ、積まれた藁、桑の木や柿の木などからは雪解けの後に待ち構えている仕事のようなすが見えるようでした。

滋賀県の平均最深積雪量図（単位・センチ）
（最近30年間の平均）



滋賀県災害史より





1. 凍てる朝。右の遠景は小谷山（木之本町）



2. 里山も白いペールに（垣籠町）



3. 移流霧に包まれた村と柿の木（垣籠町）



4. 吹雪。風の音が胸を揺する（東上坂町）



5. 朝日を浴びて踊るような群の木。枝の雪はすぐに溶け落ちる（木之本町）